

黙示録8章 「神のラツパ」

1A 祭壇の火 1-5

1B 半時間ばかりの静けさ 1-2

2B 金の香壇 3-5

2A 投げ込まれた香炉 6-13

1B 三分の一の破滅 6-12

1C 地 6-7

2C 海 8-9

3C 川 10-11

4C 天 12

2B なお三つのわざわい 13

本文

黙示録8章を開いてください。私たちは6章から、小羊なるイエス様が、七つの封印を解かれるところを読んでいます。それが全地に対する神の購入証書であり、世界をキリストにあってご自分のものとする、その所有権を行使することであることを学んでいます。今、私たちは神によって贖われていない世界を見ています。地上に不法がはびこり、罪が増し加わり、曲げられた世に生きています。そこで、キリストによって罪が取り除かれ、悔い改めることによって魂を贖っていただいたキリスト者がいるのです。ペテロは、悔い改めたユダヤ人たちに対して、「使 2:40 この曲がった時代から救われなさい」と言いました。そして、封印を解くことによって主は福音による救いを受け入れない世界に対して裁きを行われています。

7章において、四人の御使いが、地の四隅に立っていたことを思い出してください。それは、「7:1 その後、私は四人の御使いを見た。彼らは地の四隅に立ち、地の四方の風をしっかりと押さえて、地にも海にもどんな木にも吹きつけないようにしていた。」とありました。印を額に押ししてしまった今、8章では、主は第七の封印を解かれることによって、地や海に災いが下るようにされます。

1A 祭壇の火 1-5

1B 半時間ばかりの静けさ 1-2

¹ 子羊が第七の封印を解いたとき、天に半時間ほどの静けさがあった。² それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラツパが与えられた。

ついに、「第七の封印」を小羊が解かれました。これが最後の封印ですから、これで世は神のもの、キリストのものになると思いきや、その第七の封印の中にさらに七つのラツパによる災いがある

るのです。私たちはここで、黙示録を、旧約聖書を含めた、神の一貫したご計画の中で眺める必要があります。主は、その聖なるご性質からカナン人を聖絶しなさいという命令をお与えになりました。ヨシュア率いるイスラエル人は、ヨルダン川を渡河した後にすぐに出て来るエリコの町を包囲しました。しかし、一日に、その城壁の周りを一周しなさいと言うものなのです。七人の祭司が雄羊の角笛をもって、吹き鳴らします。その後に契約の箱を担ぐレビ人が続きます。その前後に、すなわちラツパを吹き鳴らす祭司の前と、神の箱の後に、武装したイスラエル人が進みます。それを一日に一周行ないます。

そしてそれを六日の間、行なうのです。そして七日目になると、彼らは同じ仕方で七度回ります。そして、祭司たちは角笛を吹き鳴らして、民が大声でときの声を上げると城壁が崩れ落ちたというものです。これから私たちは、七人の御使いがラツパを吹き鳴らすところを見ます。そして、11章19節には、天における神殿の中に契約の箱が見えます。ここから分かることは次のことです。第一に、神が、ご自分の聖なる所からの裁きを行われる時に、ラツパの吹き鳴らす音をもって行なわれるということ。第二に、それは神の契約の箱、神のご臨在されているところから来ていることです。神ご自身の聖と義によって、これから御怒りをいよいよ激しく下すということです。第七日目に七週回ると同じように、第七の封印を解けば、七つのラツパがあります。レビ記26章には、イスラエルの民が悔い改めない、さらに七倍にして懲らしめると書かれており、これは、悔い改めなければ、神の裁きの度合いがさらに強められることを意味しているのです。

第七の封印が解かれると、「天に半時間ほどの静けさがあつた」とあります。これは、4章以降、天において四つの生き物や二十四人の長老、そして無数の御使いが大声で主を礼拝し、賛美し、殉教した大勢の聖徒たちが喜びの声を上げている中で、全くの静けさが起こりました。静かであるということが、主なる神がこれから行われることを、天にいる者たちが畏怖の念で見つめていることを伺わせます。ゼカリヤ書2章の最後には、「2:13 すべての肉なる者よ、【主】の前で静まれ。主が聖なる御住まいから立ち上がられるからだ。」とあります。

そして「ラツパ」であります。聖書では、雄羊の角によって造られる「角笛(ショーファー)」があります。また民数記10章には銀によって造られたラツパも出てきます。そして角笛は、金属音ではなく、象の鳴き声に少し似ています。イスラエル人たちに十戒をお語りになるために、シナイ山に主が降りて来られたときのことを思い出してください。「出19:16 三日目の朝、雷鳴と稲妻と厚い雲が山の上にあつて、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」聖なる主が来られるときに、雷といわずまと密雲があり、角笛も非常に高く鳴り響きます。おそらく、これは主とともにやって来た御使いたちが吹き鳴らす角笛の音であつたのでしょう。が、モーセの律法は、御使いによって定められたと言っています(使徒7:53)。ですから、七人の御使いが聖なる神の御座から、ラツパによって裁きを執行する姿であります。

そして、銀のラッパが民数記 10 章に二つ登場しますが、イスラエルがシナイ山から旅を始めるときに、会衆を召集し、旅を始めるために呼びかけるためのラッパです。また、主への祭りの時にも、吹き鳴らされます。実際、レビ記 23 章には、秋の祭りの一つに、「ラッパを吹き鳴らす日」があり、そのときに人々はヨム・キプール、つまり贖罪日まで断食をしたり、悔い改めの時とします。そして銀のラッパは、自分たちを襲う侵略者への戦いに出るときに使われます。

ここ 8 章の地上への災いは、この主の戦いを戦うという意味合いでのラッパの音でありましょう。角笛が吹き鳴らされる時も、先に言及したように、ヨシュアが率いるイスラエル軍がエリコを陥落させるとき、角笛を吹き鳴らして、それからときの声をあげると、エリコの城壁が崩れ落ちました。士師記では、ギデオンがイスラエル兵士三百人を連れて、ミデヤン軍を倒したとき、一人一人に角笛を吹かせました。サムエル記第一では、サウル王やヨナタンが角笛を吹き鳴らして、イスラエル兵士たちを呼び集めています。

そして預言書には、主がさばきを行なわれるとき、主が怒りを発せられるときに、ラッパを吹き鳴らしておられます。ヨエルの預言を見てみましょう。「2:1 シオンで角笛を吹き鳴らし、わたしの聖なる山でときの声をあげよ。」地に住むすべての者は、恐れおののけ。【主】の日が来るからだ。その日は近い。」とあります。主の日において、角笛が吹き鳴らされます。続けて読むと、「2:2 それは闇と暗闇の日。雲と暗黒の日。数が多く、力の強い民が、暁とともに山々の上に進んで来る。このようなことは、昔から起こったことがなく、これから後、代々の時代までも再び起こることはない。」、さらに 4 節には「その姿は馬さながら、軍馬のように駆け巡る。」とあり、次回学ぶ黙示録 9 章の内容になっています。ですから、主の日において、万軍の主と呼ばれる神が、御使いによってこの地上に制裁を加えられるのです。

ところで、テサロニケ人への手紙第一の 4 章には、有名な携拳の預言があります。そこにもラッパについて書かれています。「4:17 主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。」これは、主が戦われるためのラッパではなく、キリストのうちにある死者や生き残っている私たちが、引き寄せて、ご自分のみもとに集められるためのラッパです。ちょうどイスラエルが、銀のラッパの音を聞いて、集まって、旅を再会するように、私たちもキリストのうちにある者はみな、神のラッパの音によって一挙に引き上げられ、空中にまで降りてこられたキリストのみもとに集められます。けれども黙示録 8 章では、主が戦われるためのラッパです。

2B 金の香壇 3-5

³ また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであ

った。⁴ 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。⁵ それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声がとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。

先ほどの七人の御使いとは異なる、もうひとりの御使いが来ています。このパターン、様式は、7章における御使いの動きでもそうでした。四人の御使いが地の四隅に立って災いを押さえ、そしてもうひとりの御使いが、生ける神の印を持ってやってきています。ここでは、この御使いは、金の香炉を持っていて、祭壇の所まで来ています。これは、青銅の祭壇ではなく、至聖所の前にある香をたく壇、香壇です。香炉には香が盛られます。その祭壇の火でその香炉を満たして、香が焚かれます。その煙が神の御前に届きます。香炉に火を満たしてから、地に投げつけました。すると、「雷鳴と声といわずまと地震が起こった」とあります。

ここの情景は、これまでもお話したように、地上にある幕屋が模型として示した、実際の天にあるものの幻です。「ヘブル 8:5 この祭司たちは、天にあるものの写しと影に仕えています。それは、モーセが幕屋を設営しようとしたときに、御告げを受けたとおりのものです。神は、「よく注意して、山であなたに示された型どおりに、すべてのものを作らなければならない」と言われました。」契約の箱から始まり、その上に載せる宥めの蓋、そして臨在のパンの机、燭台、幕屋の幕、支える板、その板のための棒、そして聖所と至聖所を仕切る垂れ幕を教えます。その至聖所の垂れ幕の所に、香壇があります。そして外庭には、青銅の祭壇があります。また祭壇と聖所の間に、手足を洗うための洗盤もあります。そして外庭には東に門があり、その門の垂れ幕にはケルビムが織っており、同じように聖所への入口にも、また至聖所への入口にもケルビムが織ってあります。

主はシナイにおいて、イスラエルの民にご自分の天における栄光を地上でお見せになったのです。天における実体を、地上において模型で表していました。私たちは、幕屋であるとか神殿であるとか、そしてそこで行われるいけにえであるとか、なかなか馴染みが出ないものです。けれども、「何々をしなければいけない」という命令については、注目されて、そこに焦点が当てられます。しかし聖書の中心は、神の栄光です。そしてキリストが流された血によって示されている神の栄光が前面に出ています。自分が神に対して何をする以上に、神がキリストにあって何をしておられるのか、ということが中心に描かれています。

そして、ここで御使いは、「聖徒たちの祈りとともに」香が捧げられています。この祈りとは何でしょうか？それは、5章8節に、四つの生き物と24人の長老が香のはいった金の鉢を持ってきて、小羊の前にひれ伏したとありますが、「その香は聖徒たちの祈りであった」とあります。そして、6章において、第五の封印が解かれたとき、祭壇の下にいたたましいのことを思い出してください。彼らは、「6:10 聖なるまことの主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者たちに私たちの血の復讐をなさらないのですか。」と言いました。これら聖徒たちの祈り、地にさばきを行なってくださいとい

う祈りが、今、神の御前に立ち上っているのです。そして 7 章に、大患難から救い出された彼らの姿を見ることができました。したがって、8 章からは、地に残されている人々、福音を拒んだ者たちに対する神の怒りが現れているのです。

ここから私は、次のペテロ第一の言葉を思い出します。「1ペテロ 1:17 また、人をそれぞれのわざにしたがって公平にさばかれる方を父と呼んでいるのなら、この世に寄留している時を、恐れつつ過ごしなさい。」恐れつつ、つまりおそれかしこみつづき生きるのです。福音を拒んでいる頑なな心、神に反逆している世について執り成して、祈るべきです。アブラハムがちょうど、主からソドムを滅ぼすと言われた時にそれでも待ってくださいと執り成したように、また、実を結ばない無花果の木を主人が切り倒そうとした時に、園の番人が執り成したように、です。「ルカ 13:8-9 番人は答えた。『ご主人様、どうか、今年もう一年そのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥料をやってみます。9 それで来年、実を結べばよいでしょう。それでもだめなら、切り倒してください。』」

そして、「祭壇の火で満たしてから地に投げつけた」とあります。火がくべられるということは、火による裁きです。使徒ペテロは、ノアの時代の水による裁きのことを話した後に、こう言いました。「Ⅱペテロ 3:6-7 しかし、今ある天と地は、同じみことばによって、火で焼かれるために取っておかれ、不敬虔な者たちのさばきと滅びの日まで保たれているのです。」

2A 投げ込まれた香炉 6-13

1B 三分の一の破滅 6-12

1C 地 6-7

⁶ また、七つのラツパを持った七人の御使いたちは、ラツパを吹く用意をした。⁷ 第一の御使いがラツパを吹いた。すると、血の混じった雹と火が現れて、地に投げ込まれた。そして地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。

第一の御使いによるラツパは、「血の混じった雹と火」をもたらしました。同じく出エジプト記にて、主がエジプトの国をさばかれるとき、雹の災いをもたらされています。「9:23-25 モーセが杖を天に向けて差し伸ばすと、主は雷と雹を送り、火が地に向かって走った。主はエジプトの国に雹を降らせた。雹が降り、雹のただ中を火がひらめき渡った。建国以来エジプトの国中どこにもそのようなことのなかった、きわめて激しいものであった。雹はエジプト全土にわたって、人をはじめ獣に至るまで、野にいるすべてのものを打ち、また野の草をみな打った。野の木もことごとく打ち砕いた。」とあります。同じような災いをもって、今、主は全世界をさばかれています。

「地の三分の一が焼かれ、木々の三分の一も焼かれ、すべての青草も焼かれてしまった。」とありますが、主はご自身の天地創造において造られた秩序を一部、壊されます。天地創造の三日目に、下にある水を分けてかわいたところとし、そこを陸と名づけ、水を海と名付けられました。そし

て陸において、種を生じる草や木をお与えになりました。そしてそこから取れる実を食べることによって人は生きるようにされました。そこで、この「木」は、実を結ばせるところの木としての言葉が使われています。しかし、これらが神から来ているということを受け入れない、その根本的な罪があります。「ローマ 1:20-21 神の、目に見えない性質、すなわち神の永遠の力と神性は、世界が創造されたときから被造物を通して知られ、はっきりと認められるので、彼らに弁解の余地はありません。21 彼らは神を知っていながら、神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その鈍い心は暗くなったのです。」それで、黙示録では、福音というのが創造主である神を認めよ、というもののなのです。「黙示 14:7 彼は大声で言った。「神を恐れよ。神に栄光を帰せよ。神のさばきの時が来たからだ。天と地と海と水の源を創造した方を礼拝せよ。」」

2C 海 8-9

⁸ 第二の御使いがラッパを吹いた。すると、火の燃えている大きな山のようなものが、海に投げ込まれた。そして海の三分の一が血になった。⁹ また、海の中にいる被造物で、いのちのあるものの三分の一が死に、船の三分の一が壊された。

第二の御使いのラッパもまた、火による裁きです。「火の燃えている大きな山のようなもの」とあります。大きな山とは言っていません、山のようなものです。ヨハネは、天における幻を自分の知っている言語の表現で何とか表現しようと努力しているのですが、何にも当てはまっていなかったようで、「ようなもの」となっています。

この海に対する災いは、エジプトに下った十の災いで、第一の災いを思い出します。ナイル川が血になるというものでした。ここでは海全体の三分の一が血となりました。そして、海洋生物が滅ぼされています。また、海上の舟も三分の一が滅ぼされています。このことによって、人々の食生活に対して、海上のものが破壊されることによって断たれてしまいます。それだけでなく、海上の船はあらゆる商業が発達しているのですから、それが壊されるということは根本的な生活基盤の破壊を意味しています。

3C 川 10-11

¹⁰ 第三の御使いがラッパを吹いた。すると、天から、たいまつのように燃えている大きな星が落ちて来て、川の三分の一とその水源の上に落ちた。¹¹ この星の名は「苦よもぎ」と呼ばれ、水の三分の一は苦よもぎのようになった。水が苦くなったので、その水のために多くの人が死んだ。

第三の御使いによるラッパは、「たいまつのように燃えている大きな星」がもたらされました。これは、天使が「星」と呼ばれることがたくさんありますが、ここでは、文字通りの星でしょう。

「苦よもぎ」とありますが、これは実際にある植物の名前です。ネットにはこう書いてあります。「ヨ

モギに似ていますが、葉がヨモギよりも細く、白っぽい感じで、7～8月に黄色い小さな花をつけます。…現在では多くの国で、製造販売が禁止されています。理由は、ニガヨモギの精油成分が神経系に作用して精神障害をおこす危険があるからだそうです。…ニガヨモギに含まれるツヨン(thujone)という物質がマリファナの有効成分のTHC(tetrahydrocannabinol)に似た化学構造を持っていて、人々を常習、幻覚、錯乱、痙攣、更には狂気や自殺に駆り立てるそうです。』¹人を狂わせ、死なせるような要素を持っています。そしてエレミヤ書には、実際に苦よもぎによる神のさばきが書かれています。「エレ 23:15 それゆえ、万軍の【主】は、預言者たちについてこう言われる。「見よ。わたしは彼らに、苦よもぎを食べさせ、毒の水を飲ませる。不敬虔がエルサレムの預言者たちから出て、全土に広がったからだ。」」同じように今、苦よもぎによる毒の水で、多くの者が死にました。

興味深いことは、今のウクライナ、かつてのソ連であったところで、チョルノーブリにあった原発が爆発しました。そのウクライナ語の地名は、「苦よもぎ」という言葉です。この災いを指し示すような前兆的な出来事でありました。放射能の汚染というのが、私たち人類に根本的な脅威をもたらしていますが、患難時代においてはそれが全世界の三分の一というレベルで起こります。

4C 天 12

こうして地上の三分の一、海の三分の一、そして水源の三分の一がだめになりました。次は、天界において三分の一に災いが下ります。

¹² 第四の御使いがラツパを吹いた。すると太陽の三分の一と、月の三分の一、また星の三分の一が打たれたので、それらの三分の一は暗くなり、昼の三分の一は光を失い、夜も同じようになった。

太陽と月と星の光源が三分の一に低下しています。天地創造の第四日目の太陽、月、星に対して、ご自身でその秩序を壊しておられます。そして、この災いもまたエジプトに災いが下った時と似ています。九つ目の災いが暗やみでしたイスラエルの住んでいるところは光がありましたが、そこ以外は三日間、真っ暗になりました。同じように主は終わりの日も、暗やみによってさばかれます。主の日は、「暗黒の日」と呼ばれています。先ほど引用したヨエル書に、主の日は暗黒の日であるとありました。

聖書は、暗闇と光の対比によって、前者が罪、また神に反逆する世、また神の怒りを表している世界を示しています。光は正義や真実、神ご自身のおられるところ、また癒しや平安をも表しています。再臨のキリストは、マラキ書で「義の太陽」と呼ばれ、イザヤ書には太陽や月の光が七倍にまでなると書かれています。イエス様は、ヨハネによる福音書でしきりに、ご自身が世の光であり、光のあるうちに光を信じなさいと言われました。「ヨハネ 12:35-36 もうしばらく、光はあなたがたの

¹ <http://www.page.sannet.ne.jp/mahekawa/nigayomogi.htm>

間にあります。闇があなたがたを襲うことがないように、あなたがたは光があるうちに歩きなさい。闇の中を歩く者は、自分がどこに行くのか分かりません。36 自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」イエスは、これらのことを話すと、立ち去って彼らから身を隠された。」ですから、文字通りの光が少なくなり、人の命の根源、命の支えとなっている光を一部取り除かれていると同時に、霊的な意味、罪の中にあなたは生きているのだよ、という裁きがあります。

そして、この四つの災いを見ると、全てが「**三分の一**」となっていました。言い換えれば、三分の二は残っているのです。主は実は、この災いにおいても憐れみを示しておられます。忍耐深くあられます。人々が悔い改め、救われることを願っておられます。それが分かるのは、その後の話です。9 章の終わりに、こうした災害を受けてもなおのこと、悔い改めないでいる者たちがいることをヨハネは書き記しています。そして 16 章においては、さらに究極の太陽や暗闇による裁き、海や川の源に対する裁き、つまり残りの三分の二にも災害をもたらすのですが、それでも悔い改めない者たちがいます(9 節)。これはまさに、心を頑なにしたファラオを思い出させるものであり、彼もまた、神の忍耐を軽んじて心を頑なにさせた者でした。(出エジ 9:15-16)主は、たとえ最後まで悔い改めないことを初めから知っておられても、それでも忍耐を示しておられるのです。

2B なお三つのわざわい 13

¹³また私は見た。そして、一羽の鷲が中天を飛びながら、大声でこう言うのを聞いた。「わざわいだ、わざわいだ、わざわいが来る。地上に住む者たちに。三人の御使いが吹こうとしている残りのラツパの音によって。」

第四のラツパまで見ました。あと残りの三つの災いがいかにひどいかを予告しています。「わざわいだ」と三回叫んでいますが、それは一つ一つの災いを叫んでいるからです。「鷲」とありますが、セラフィムやケルビムは、翼があるように、この鷲も、天的な存在、御使いのような存在であることは十分に考えられます。

このように火による災いが始まりました。そこで読みたいのは、そのペテロ第二の手紙です。「3:9 主は、ある人たちが遅れていると知っているように、約束したことを遅らせているのではなく、あなたがたに対して忍耐しておられるのです。だれも滅びることがなく、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。」まだ、私たちはこのような災いが下るのを見ていません。それは、神の御心があるからです、ひとりでも悔い改めて滅びから免れるためです。その忍耐を思っ、私たち自身も悔い改め、そして周りの人々が悔い改めることを祈り求めて行きましょう。